

—— チェルノブイリに思いをよせて ——

## ポレーシェ



## 「チェルノブイリ原発事故から学ぶ講演会」in 掛川

実行委員会事務局長 金原和子

昨年来、実行委員会を立ち上げ、準備を進めてきた「チェルノブイリ原発事故から学ぶ講演会」が、4月18日、掛川市生涯学習センターで盛大に開催されました。予想を上回る来場者の数に実行委員一同感激し、快く賛同して資金面で支えてくださった方々に深く感謝しております。

ビデオ「チェルノブイリシンдрーム」の一部紹介、シチエルバク氏の講演「科学技術文明への警告」、次いでティーヒー氏による「被災者の現状とその社会的問題」の講演が行われました。『展示とビデオにみるチェルノブイリ』も2日間同会場の催物広場において併設し、多数の皆さんが来場し、熱心に見ていただきました。

こんなにも多くの人々が集まってくれたのは、誰もがチェルノブイリの事故は他人事ではないと感じているからなのでしょう。浜岡原発に隣接し、ブルサーマル・地震・テロ・ミサイルなど、さまざまな脅威にさらされ、さらに、世界的に原発の再評価が行われている今日の状況下で、私たちは、どのようにしたらよいのでしょうか。重い課題ですが、学習を続け、なんらかの行動が必要ではないかと考えています。

「掛川の美しい自然が、いつまでも元気でありますように！」…というシチエルバク氏の結びの言葉は、事故後現地で取材を続けた彼の切実なる 祈りのように思われました。

なお、講演会の詳細を、実行委員会編集の報告書でご覧くださるようお願いいたします。(1冊500円・10冊以上なら300円、問合せTEL&FAX0537-48-2688 金原)

(注) 被災者のためにと寄せられたカンパ44万円は、「子ども基金」と「救援・中部」に、それぞれ22万円ずつ寄付されました。(チェル教事務局追記)



〒466-0822 名古屋市昭和区楽園町137 1-10

チェルノブイリ救援・中部 代表：市原佳代

郵便振替：00880-7-108610

TEL/FAX：052-836-1073 (月・水・金 10:00~17:00)

E-mail：chachubu@muo.biglobe.ne.jp

ホームページ：http://www.chemobyl-chubu-jp.org

東京平和運動センター主催

### 「チェルノブイリ・スタディ・ツアー」に参加して

昨年の被爆60周年ヒロシマ大会で、会員の方から「来年はチェルノブイリ原発事故20年に当たるので、当方（東京平和運動センター）にて企画をして欲しい」との声が上がり、今年の2月ごろから準備をし、6月30日から7月9日の期間でツアーを実施しました。

準備や企画などは、「チェルノブイリ救援・中部」の神野さん、現地の竹内さんにアドバイスや心構えなどを指導頂き感謝しております。当初、10名の団で行く予定でしたが1名のキャンセルがあり、神野さんに同行をお願いし、私どもの加盟労組代表7名と個人会員2名、総勢10名のスタディ・ツアーとなりました。

なぜ事故は起きたのか？ 事故処理や被災者の対応はどうであったのか？ 原発事故の状況と放射能減衰対策は進んでいるのか？ 汚染地域住民の生活はどうか？ 被災者や事故後に生まれた子どもたちの健康はどうか？など、多くの課題を背負ってのツアーでした。

キエフではチェルノブイリ博物館の学芸員のナタリアさん、ジトーミルでは「チェルノブイリの消防士たち」のチュマクさんや「チェルノブイリの人質たち」のキリチャンスキーさん達の案内で多くの場所や人々と接することができ、非常に有意義なスタディ・ツアーとなりました。

今回のツアーで感じたことは、人類がつくり出した核と派生する放射線に対して、責任を取るべき国々やウクライナ政府が無責任であり、無力であるという悲しい現実を感じました。他方、キエフでお会いしたゼムリャキの人たちや「消防士たち」「人質たち」の事故後の運動や活動に感激し、また、自分達で解決しようとする前向きな明るい笑顔には助けられました。放射線は見えないし、匂いもしないし、肌で感じることもできませんが、多くの出会いやお話で、うっすらとその正体を分かるような気がしています。やはり事故現場での放射線の高さには驚かされました。

私達は7月25日、「チェルノブイリ事故20年チャリティー・コンサート」を開催し、ほんの第一歩ですが、私達のできることを徐々に拡大するつもりです。（東京平和運動センター 事務局長 関 久）

### \*\*\* ウクライナと思いが結びつく \*\*\*

6月30日から7月9日まで、東京平和運動センターのスタディ・ツアーが行われた。このツアー一行10人は、ウクライナの地で、温かく迎えられ、「チェルノブイリの人質たち」や「チェルノブイリの消防士たち」などの皆さんにより、歓迎会をはじめさよならパーティーまで開いていただいた。しの温かいもてなしには恐縮し大変驚いた。しかし考えてみればそれは、私たちのツアーを紹介していただいた、「救援・中部」のこれまで16年という長い期間のジトーミル州を中心とするチェルノブイリ事故の被災者への医療や心の支援、奨学金、メンテナンス人材育成などの心のこもった救援が、この地で高く評価されており、私たち一行はそのおかげで歓迎されたということはあきらかだ。キエフ以降の全行程では、運転手付きのマイクロバスも仕立てていただいた。また、途中私がはしなくも急病になって困っていると、即座にチェルノブイリ原発診療所を紹介していただき処置をほどこしてもらったのは、九死に一生を得た思いだった。



〈キエフ/チェルノブイリ博物館前にて〉

おかげで、日本人で初めて同診療所で施術を受けるという貴重な記録となったと思う。歓迎されたあまり、ウオッカで記憶が遠くなったものも何人かいた。このツアーの成果が出るまでには、まだ時間がかかると思うが、これだけは言える。「百聞は一見にしかず」と、一行10人の思いは、はるかなるウクライナの悲劇の地の人々としっかりと結びついた。（東京平和運動センター 会員 小林 晃）



〈前列 右から2人目が関さん〉



## ナロジチ復興計画(菜の花編)現地調査に行きます。

長野県南箕輪村 原 富男

9月5日から14日まで、ナロジチ復興計画(菜の花編)の調査打ち合わせの為に、ウクライナを訪問することになりました。訪問者は、河田昌東・関浩行・原の3名です。今回の訪問では、ナロジチ復興計画の柱である「菜の花プロジェクト」(菜の花を育て放射能を吸着させ、育った菜種からバイオディーゼル燃料を取り出し、茎と葉からメタン

ガスを発生させる)に必要な調査と打ち合わせを行います。役割分担は、河田さんが放射能の吸着、関さんがバイオディーゼル燃料、私がバイオガスということになるでしょうか。

現地では、ナロジチ地区行政・保健所・コルホーズ(集団農場)・共同研究に関わってくれる関係者達を訪れ、菜種栽培の適地を探し、実際に栽培から加工にたずさわる人を探すことになります。ウクライナでは、ロシアとの天然ガスの価格交渉に見られるように、自前のエネルギーを持っていないため、経済の根幹がぐらついているのが現状です。しかし、産油国の原油値上げとクリーンエネルギーを待望する世論の中で、植物燃料利用が一段と進み、EUではバイオディーゼル燃料の活用が加速しています。菜種油の増産の波はウクライナにも及び、EUへの輸出用菜種の栽培が増大しています。菜種を輸出するだけでは、余りにももったいない話です。自国で燃料にしてこそ！です。

ウクライナが経済的に安定する鍵の一つが菜種であり、放射能の除去という課題が同時に解決されるとなれば、私達の計画は大きな意味を持ちます。市民団体ができることに限りはありますが、希望へのモデルを提示することはできると思います。訪問中、ナロジチには3日ほど滞在し、適地と適人を探し、更に、農業大学とも2日ほど話し合いの場を持って、来年ナロジチに菜種を蒔くことができるよう準備をする予定です。

## ウクライナを訪問することになって

特定非営利活動法人 伊那谷菜の花楽舎 理事長 関 浩行  
初めての海外、そしてBDF(バイオディーゼル燃料)製造に携わっているといっても小さなNPO施設。広大なウクライナの平原での取り組みに、役立つことができるのだろうか。そんなこんなで、ウクライナ行きには躊躇する気持ちがありましたが、原さんからの熱心なお誘いで行くことに決めました。「今できることを、今のうちにしておこう…」そう思っ



そう思っのウクライナ行きです。私達は、地元の「アルプス開発技術研究所」による独自設計のBDF製造装置をもって、今年1月から本生産を開始しました。独自設計にした理由は、不安定要素を抱える廃食用油から高品質の製品を作るためには、工夫や技術が必要で、既存の装置に満足できなかったからです。また、「これらのノウハウを地域内で確保し、地域に還元していくことが望ましい」と考えたからです。そんな想いを抱いて、BDFの製造に取り組んでいますが、予想しきれない様々な問題が日々発生します。私自身は、製造業に身を置いた事は無く、試行錯誤、試練の毎日でした。ナタネの栽培も行ってきましたが、自然条件の大きく違うウクライナでは、さして参考にもならないでしょう。そしてBDFの生産に関しても、ナタネ油を原料にするのと廃食用油を原料にするのでは違いがありますし、生産規模も私達は日量たった145L。それでも、初めてのシステムと装置で、試行錯誤しながら一年間やってきたことが役立つのなら、こんなに嬉しいことはありません。そんな思いで9月、ウクライナに行ってきます。

## 定時総会 & チェル救デー開催

去る6月10日(土)、あいちNPO交流プラザにて定時総会が開催されました。昨年度の事業報告・決算報告とその承認、そして今年度の事業や予算の説明がされました。正会員の方々に、今年度からの新事業「菜の花プロジェクト」について、初めて具体的な内容をお話しする場となりました。



出席者からは、今年度より粉ミルク支援が減額されることになった理由を求められ、「粉ミルクは現在、州立小児病院などは自助努力で賄うことができるようになってきており、減額しても影響はないと判断しました。粉ミルク指定の寄付金については、今までどおり粉ミルクの支援金となります。」という説明がされました。

総会終了後のチェル救デーでは、4月に行ったスタディ・ツアーの参加者からの報告と、その中の一人、宮腰さん撮影のビデオを上映しました。ビデオでは、「1 グリプナ・バザー」の様子も映し出されており、参加者から聞いていた「すさまじい盛況ぶり」という感想は、過言ではないことがよく分かりました。画面から、一つの品物を奪い合う人たちの迫力が伝わってきました(!!)

今回のスタ・ツアは、ボレーシェ掲載の感想文からもお分かりのように、今まで「救援・中部」と全く関わりのなかった方たちの参加が多く、新鮮な視点からの報告をたくさん聞くことができました。スタ・ツア参加の募集を始めたのが昨年の6月。他のNGOのスタ・ツアと比べると、目的地がヨーロッパであり、期間が長く価格が高いというハンディのためか、なかなか参加者が集まらず苦戦を強いられましたが、無事成行することができ、本当によかったです。

茶話会では、スタ・ツアに読売新聞の記者お二人が参加されたことに話がおよび、「保守系の新聞記者が参加し、記事を書いたということはすごい」などの意見が、出席者から飛び出しました。また、チェルノブイリ・チャリティーコンサートを企画されているという出席者の方もいらっしゃいました。実現が楽しみです。

残念なことに、総会の出席者が年々減少しており、悩みの種になっています。総会に関心を持っていただけないのは、『健全な運営のため、総会が荒れないので面白くない(!!)』ことが原因の一つなのではないでしょうか。魅力ある総会への模索は続きます。(佳)

## ウクライナ講座のお知らせ

ウクライナ講座「ナロジチ菜の花プロジェクト・事前調査—9月訪問団報告」を開催します。いよいよ実現に向けた活動の第一歩の報告です。

講座内容は、参加者、宮腰吉郎さんの記録映像上映と、河田昌東さんと原富男さんの報告です。どうぞ、お見逃しとお聞き逃しなく！

■日時 9月30日(土) 午後1時30分～4時

■場所 あいちNPO交流プラザ 会議室C

(地下鉄「市役所」下車 2番出口東へ徒歩3分 TEL 052-961-8100)

■参加費無料

～正と負の遺産を訪ねる旅～

## 「キエフとチェルノブイリ/クラクフとアウシュビッツ」

「スタディ」に「観光」もミックス!! キエフとチェルノブイリ/クラクフとアウシュビッツ の2本立てのツアーです。ジトーミルでは、NPO法人「チェルノブイリ救援・中部」が活動しています。現地の被災者との救援活動も見ます。ぜひご参加下さい。

期間：10月13日～20日(8日間) 出発地：名古屋セントレア空港(ルフトハンザ・ドイツ航空利用)

旅行代金(予定価格)：245,000円(参加人数等によって変わります。)

\*別途航空保険料・空港税・燃油特別付加運賃がかかります。(7月19日レートで+29,240円)

|           |                                                                                                                           |          |
|-----------|---------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------|----------|
| 10月13日(金) | 10:25 名古屋発 LH737、15:40 フランクフルト着<br>18:20 フランクフルト発 LH2258<br>20:00 クラクフ着 空港から専用車でホテルへ                                      | クラクフ泊    |
| 10月14日(土) | 午前 専用車で(世界遺産)ヴィエリチカ塩坑へ、昼食<br>午後 専用車でアウシュビッツへ<br>(世界遺産)アウシュビッツ強制収容所&ビルケナウ見学<br>夕食各自 *オプショナルツアー(夕食&お買い物)                    | クラクフ泊    |
| 10月15日(日) | 出発までフリー (世界遺産)クラクフ市内<br>* オプショナルツアー(市内観光&昼食、そのまま駅へ)<br>(オプショナルツアー不参加の方は、自力で駅へ)<br>13:35 クラクフ発、列車(2等寝台車)でキエフへ<br>夕食 車中でお弁当 | 車中泊      |
| 10月16日(月) | 10:29 キエフ着、チェルノブイリ博物館見学 午後フリー<br>* オプショナルツアー(昼食&キエフ市内(世界遺産)観光)<br>夕刻 専用車でジトーミルへ 夕食                                        | ジトーミル泊   |
| 10月17日(火) | 09:30 チェルノブイリ被災者モニュメント、<br>慈善基金「チェルノブイリの消防士たち」・「チェルノ<br>ブイリの人質」・医療センター訪問、昼食<br>午後 宇宙飛行士博物館見学、パザール、シャシリクの夕食                | ジトーミル泊   |
| 10月18日(水) | 08:30 ジトーミルからキエフ・ボリスピリ空港へ<br>13:50 キエフ着 LH3237<br>15:35 フランクフルト着 列車でホテルへ                                                  | フランクフルト泊 |
| 10月19日(木) | 午前中 フリー<br>11:30 ホテルを出て列車で空港へ<br>14:15 フランクフルト発 LH736                                                                     | 機中泊      |
| 10月20日(金) | 08:35 名古屋着                                                                                                                |          |

ツアー企画：チェルノブイリ救援・中部

取扱旅行社：ユーラシア東海

\*ご出発を成田・関空発着にして、名古屋発のメンバーとフランクフルトで合流も可能な場合があります。ご希望の方は、至急ご連絡ください。

\*正式なお申込みは、後日で結構です。正式なお申込み前のキャンセル料は発生しません。

\*オプショナルツアーの料金などは、直接、「ユーラシア東海・大野」まで、お問い合わせ下さい。

お申込み・お問い合わせは、

ユーラシア東海・大野がお待ちいたしております。

Tel: 052-263-4990

Fax: 052-263-4723

E-mail: euras-ngo@mb.newweb.co.jp

URL: <http://www.k3dion.ne.jp/~eurasia>

チェルノブイリ事故 20 周年記念 スタディ・ツアー特集 (第 2 弾)



「水が出るようになった  
ポロツキ村の井戸」

「明るく、暖かく、笑って生きる彼等の強さに、乾杯！」

神谷未生 (看護師/テキサス在住)

「チェルノブイリの原発事故 20 周年のスタディ・ツアーがあるんだけど、行く？」と日本にいる父から言われたのが今年の三月。漠然と、国際協力や、NGO 関係の仕事に興味があり、NGO の実際の活動ぶりを間近に見たいとの思いもあって、それでも特に何の気負いもなく、軽い気持ちで参加を決定。

チェルノブイリの事故当時、小学生だった私は、ニュースがチェルノブイリの話で持ち切りだった事は覚えている。そのニュースのトーンから、なにかすごく大変な、危ない事が起こっているのは解った。そしてその後、たまに何かのニュースに関連して、チェルノブイリの事を耳にする事はあっても、特に注意を払うわけではなく、他の様々な事件と同様、「2 度と起きてはならない過去の事」として、私の中で処理されていた。

そして今、実際に、その事故をまだ現実として生きている人達と触れあって、20 年前の「ニュース」でしかなかったあの事故が、「顔」を持った気がする。自身も甲状腺の病気があるといった消防士。記念式典の間中、ずっと涙を流し続けていた老人。そうやって、現地の人たちと実際に人と人として関わって、彼等の事が、「人」として気になる。彼等が「被災者」だから、「かわいそう、助けてあげよう」と言うのではなく、ただ人として、出来る事をしてみたい。

毎日、何気なく聞いている「ニュース」には、それを実際に生きている人たちがいる。全ての事と関わる事は、所詮無理。それでも、だから、心に引っかかるニュースにだけでも、実際に何か行動を起こしていきたい。そんな事を思わせてくれたこのツアーは、私にとって収穫の多い物だった。そして、私たちよりもずっと近くに「死」を感じて生きていかなければいけないウクライナの人々。それでも明るく、暖かく、笑って生きている彼等の強さに乾杯したい。

「サナトリウムに滞在している人達との

交流が、印象的」

西村美也子 (龍谷大学生/キエフ大学留学中)

私は普段の生活に戻り、キエフでのんびりとした時間を過ごしています。今回のツアー参加は、戸村さんのお声掛けがなければ、全くご縁のないものでした。たった 5 日間ではありますが、参加者の皆さんとお会いできた事、またチェルノブイリに関する関心が芽生えたこと、また現地に住む人々の存在を知れたことの 3 点は、私にとってとても有意義であり、心に残るものでした。私も「ナロジチドリム」実現に向けて、その素晴らしい光景を見ることを楽しみに、今後ともこのご縁を大事にしていきたいと思っています。

日程 (滞在日数や毎日の過ごし方など) について…日本・ウクライナ間の移動がなかった分、特に疲れるということはありませんでしたが、移動と予定続きのスケジュールは少し過密かと思いました。現地滞在日数が増える場合は、間の日の半日は「自由行動・観光」などがあっても良いかと思っています。(安全かつ可能な範囲で)

通訳 (人数) について…イベントのスピーチなどを理解する際は、通訳の方の人数が限られるので少し困難でしたが、病院や博物館などの小さいスペース訪問の際は特に問題ありませんでした。2 名・男女・ウクライナ人・日本人という組み合わせは、色々な場面でとても良い機がけがされていたと思います。

滞在・訪問先 (宿泊先・各訪問先) について…宿泊先に関しては特に何もありません。サナトリウムに滞在されている人達との交流が印象的でした。各訪問先では、もてなされるばかりで少し気が引



「出来上がった作品を手に…」

けました。もちろんそれがこちらの方の習慣でとても有難いことですが、何か（お酒の席でのスピーチ以外に）日本人側から感謝の意を表することが出来れば、と思いました。

**イベント企画（祈念式典や日ウ交流他）**…各イベント参加は有意義で、とても貴重な体験でした。特に絵画展での授賞式と、学校訪問の際の子ども達の日本人への興味・好奇心はとても印象的です。また祈念式典などの公式な場に、日本の団体が実際に出向く意味は、現地の人にとって大きいものだと感じました。

**その他**…今後の関わり方や新たな計画など、会議で話された内容を可能な範囲でフォローして頂ければ、参考になったかと思います。市内観光に関しては、2時間だけでも自由時間を設けるのも良いかと。例えば、「公園周辺のみ・2人以上の行動・時間厳守など」。なんか修学旅行のようですね。

### 「自分の目で確かめ、目に見えないコワさや現実を感じ」

新井優子（天理大学生/キエフ大学留学中）

授業でも、チェルノブイリのテキストを読んでいます。先生から当時の様子を聞けるので、とても興味深いです。これも、スタッフに参加させていただいたおかげです！

**日程**については、少しハードな日程だったかなと思いました。レーシャ・ウクライナ力の博物館にも行きだかったです…。でも途中で車を止めて、何も無い木の中で乾杯したりしたのは、とても新鮮で良かったと思います。

**通訳**については、言うことはありません。

**滞在させてもらった場所**は、とても良かったです。訪問先も、個人的に行ったら普通は行かないような場所なので、貴重な体験が出来ました。

**20周年という節目**の記念式典に参加させてもらえて、とても光栄でした。もう少し、現地の人と交流が出来たら良かったなと思いました。私が、ロシア語を勉強しているというのがあったし、チェルノブイリやソ連時代を生きてきた人達から、生の話を聞くのがとても興味のあることだったので…でも、それはキエフでも出来ますが…

**今まで**、「チェルノブイリ事故があった」という事実しか頭になくて、それ以上考えることはなかったのが正直なところ。今ウクライナに住んでいて、それでも全く気にすることなく過ごしてきました。しかし、戸村さんから声をかけていただいて、やっと気を向けるようになりました。遅いかもしれないけど、その事実を目を向ける機会を与えてくださった事に、ものすごく感謝しています。近くに住んでいるということで、実際に自分の目で確かめると目に見えないコワさや、知られていない現実を感じることが出来ます。

必ずしも、安全とはいえない環境で暮らさざるをえない現実や、苦勞をたくさんしているのに笑って生活している姿に、私の方が元気を頂きました。このようなことを2度と起こしてはいけません。決して忘れてはいけない事実だと改めて思いました。

そして長い期間、時間をかけて支援されてきた「チェルノブイリ救援・中部」のおかげで、ウクライナの人との繋がりが出来ます。信頼というのはやはり時間がかかるものです。今後、また何かありましたら声をかけていただけたら光栄です。参加出来て本当に、本当に良かったです！！

### 「キーワード『実感の伴わない災害』、頭に刻み込まれ」

脇根晃弘（龍谷大学生/キエフ大学留学中）

**日程**⇒スケジュール表とおり、おおむね順調に進んだように思えます。時間に追われてスケジュールをこなしているという感じもなく、満足してそれぞれの訪問先を見学できました。ただ27日、運営委員と別々に行動したとき、消防署で時間を多くつぶしたのが、後の博物館などで少々時間に追われている感じがしました。

**通訳**⇒竹内さん、マリアさんともに分かりやすい日本語に通訳していたので、ロシア語勉強不足の私にとっては、大いに助けになりました。ただ、キャンドルセレモニー・20周年式典のときは、通



〈左：新井優子さん、右：西村美也子さん〉

訳の方どちらかのそばにいないと、スピーチの内容が分からなかったのも、後からその説明が欲しかったです。

滞在・訪問先⇒(宿泊先)サナトリウムは自然の中にあり、とてもリラックスできました。部屋の設備も、私の家よりもきれいで熱いシャワーが浴びれたりしたので、良かったです。(スタツアの意義からは外れていますが…)

⇒(各訪問先)地域住民との触れ合いが少しあったほうが良かったです。訪問先それぞれに特徴があって、とても有意義なものでした。

イベント企画⇒(記念式典)とても重要なものだという雰囲気は感じ取れたのですが、先にも述べたとおり、話の内容がいまいち分からなかったです。⇒(日ウ交流)バザー、日本文化紹介ともに、多くのウクライナ人が押し寄せて、日ウの交流はうまくいったと思いました。

その他⇒今回のスタディ・ツアーは、私にとって、とても有意義なものとなりました。各訪問先で学ぶことは多く、以前よりこの事故に対する興味が深くなりました。また、自分の勉強不足も痛感させられました。プロジチを訪れたとき、「普通だなぁ。芝生もあるし、虫も飛んでるし、犬は寝てるし。」と思いました。ただ、放射能測定器の値を見て、あることが頭に浮かびました。普段の状況と全然変わらないのに放射能の値だけが高い。それが著しく人間の健康を損なう。頭では「放射能があって、危険。」ということが分かっているけど、実感が伴わない。「実感の伴わない災害」というキーワードが今回のスタディ・ツアーで、私の頭の中に刻み込まれました。



バザーの賑わい

### 「心の中に、両国間の情緒的な種子が芽生えていく」

■ 謝 淑玲 (ビ・シェウリン) (キエフ大学留学中)

皆さん、こんにちは。私は台湾から来ている謝玲です。このたび、日本のNGOの皆さんとスタディ・ツアーに参加できて、とてもうれしく幸運に思います。私はこれまでチェルノブイリ事故について、あまり多く考えたことがなかったので、今回のツアー参加では大きな収穫がありました。一人の台湾人として考えを述べるとすると、今回のスタディ・ツアーの最大の意義は、チェルノブイリ事故をきっかけとしてですが、ウクライナと日本の両国民が、文化交流を通して触れ合ったことだと感じました。サナトリウムで、NGO「チェルノブイリ救援・中部」が、第2次世界大戦での広島・長崎の民衆の受難を写真展示しました。これは両国民が同じ痛みに対して共感し、私たちにこの深い悲しみについて気づかせ、これを忘れず、2度と過ちを繰り返してはならないことを訴えています。

同時に、バザーを準備し、当地の学校の子どもたちのために寄付しました。また生け花・折り紙・書道・遊びや日本の歌などを催し、それらはソフトな穏やかなものですが、人々に深い印象を与え、互いに好ましい記憶を残すでしょう。

それから、26日のチェルノブイリ20周年記念式典の終了後、私たちの乗った車にかわいい子どもたちが一緒に乗り込みました。私の席のそばに座ったウクライナの女の子は、日本文学がとても好きで、よく日本の童話を読んでいたと言いました。学校に善き、玄関で私たちを迎えた天真爛漫でか



折り紙を指導するシェウさん

わい子どもたちを見たときに、私は考えました。今この子どもたちの中でこの活動がどんな意味を持つかわからないけれど、しかし、彼らの心の中に次第に、両国間の情緒的な種子が芽生えていくのだとわかりました。このような感情は金銭では量れないものです。以上が、今回の活動に対しての私の感想であり、私の留学生活にこのような貴重な思い出を得ることができ、皆さんにとっても感謝しています。感謝以外に言葉はありませんが、私の心の中にとっても良い思い出として残ることと思います。ところで、もしも何かで皆さんと連絡し合うことがあれば、とてもうれしく、大歓迎です。

(原文中国語、翻訳戸村)

大気や土壌・水などから、植物を使って重金属その他の環境汚染物質を除去する方法は、かなり以前から研究されており、「バイオレメディエーション」と呼ばれる。植物が生育するために必要な栄養素を吸収する働きを利用し、汚染物質を除去するのである。セシウムやストロンチウムといった、放射性同位体を持つ元素も例外ではない。ナロジチの汚染地域で菜の花などを栽培し、土壌中の放射能レベルを下げる試みを紹介する。

### ● 土壌浄化のしくみ

植物は、生育や繁殖に必要な炭酸ガスを大気中から、水や窒素・リン・カリなどのミネラルを土壌中から、吸収する。土壌浄化も、植物のこの働きを利用する。チェルノブイリの放射能汚染で実際に問題になるのは、セシウム-137 (Cs-137) とストロンチウム-90 (Sr-90) である。「汚染地域」の基準は、Cs-137 の放射能の土壌中濃度が  $1 \text{ Ci/Km}^2$  (旧単位  $1 \text{ キュリー/Km}^2$  = 新単位では  $37 \text{ kBq/m}^2$  キロベクレル/ $\text{m}^2$ ) に相当し以上である。ところで、Cs-137 や Sr-90 を、放射能ではなく化学物質(元素)としてみれば、Cs はカリウム (K) と、Sr はカルシウム (Ca) と、その化学的性質が良く似ている。植物は、これらを区別できずに吸収し、汚染するのである。土壌浄化は、植物のこの働きを逆手に取り利用する。

### ● 土壌中濃度が問題

しかし、実際に放射能が除去できるかどうかは、土壌中の濃度による。カドミウム (Cd) 汚染田を、遺伝子組換えイネで浄化する研究などあるが、これは無理である。何故なら、Cd は毒物であり、数 ppm 以上は体内に吸収できないからで、土壌中濃度が数 ppm の Cd をイネで除去しようとすれば、1 トンの土から 1 トンのイネを収穫しなければならない。そんなことは不可能である。では、Cs-137 や Sr-90 はどうだろうか。37kBq/ $\text{m}^2$  の汚染の場合、Cs や Sr を化学物質の濃度に換算すると、汚染の深さが 10cm と仮定すれば、濃度はいずれも ppt のレベルでしかないことが分かる。即ち、ppm のさらに 100 万分の 1 (=1 兆分の 1) である。この濃度なら K や Ca と一緒に吸

収可能な濃度である。植物中の K や Ca の濃度は、植物にもよるが、0.1~1% もある。K や Ca 濃度の高い植物が Cs や Sr も良く吸収することは、過去の研究結果からも分かっている。吸収能力の高い植物を何年間か栽培すれば、比較的汚染の低い土地なら、放射能濃度は下がると期待できる。

### ● どんな植物が利用できるか

食用植物ではないが、アカザ(雑草の一種)は Cs を最も良く吸収する植物である。伝聞だが、焼け野原の広島で最初に芽生えた植物は、アカザだったという。ウクライナでよく食べるビーツやテンサイ(砂糖大根)もアカザの仲間。Cs 吸収能力が高い。しかし、Ca 濃度は高くなく、Sr-90 の浄化には向かない。現在のところ、Cs も Sr もバランスよく吸収できるのは、ナタネの仲間(学名: *Brassica sp.*) である。その上、ナタネは油を転換し、バイオ・ディーゼル油や燃料として利用できる。こうした利点が、ナタネを栽培する理由である。幸いにして、放射能はナタネの植物体や種皮には蓄積するが、油には入ってこない(勿論カリウムも)。最近の情報によると、今、ウクライナではナタネ栽培がブームになっている。菜種油を EU 諸国に売って、外貨を稼ぐためである。後で紹介するが、EU 各国では今、石油危機対策としてナタネ・ディーゼルなどのバイオ・エネルギー化を進めており、税制優遇もあって、ナタネ油は引っぱりだこである。余談だが、この分野で日本は最も遅れている。我々は、ナロジチでナタネ・ディーゼル油を自ら作り、農業回復に役立てる計画である。では、吸収した放射能はどうするのか? 以下、次号 (河田)

## ウクライナ留学日記

・・・夏／一時帰国編・・・（戸村 京子）

### <夏休み>

キエフ大学での語学留学生の授業は、6月2日に終わり、9月の新学期が始まるまでの長い夏休みに入りました（というより、私たち——同じ大学からの日本人留学生は、日本の学期終了後の2月に渡航し、ウクライナの年度から半年遅れた秋学期に入学したからです）。

そして他の国からの留学生たちは、1年間の留学を終え、別れを惜しみながらの帰国。今日はポーランドのアーニャが、来週はドイツのダニエルたちがといった具合で、寮ではお別れの小パーティがあちこちの部屋で開かれます。しかし一般の学生たちは、6月から7月にかけては試験・レポート期間で、勉強する大勢の学生が廊下のベンチにもあふれていました。

予定外に一時帰国することになって、キエフにオフィスのない航空会社のチケット変更にも四苦八苦し、空港へのタクシー予約もドキドキしながら電話、チェックイン時に、チケットの変更手続きがなされていなかったと判明・・・土壇場まで何が起こるかわからないウクライナです。

### <一時帰国して>

そして暑い日々が続く日本に帰り、逃げ場のない蒸し暑さに、キエフの木陰の爽やかさが思い出されます。暑さはともかく、キエフでは毎日、特に外出時に緊張していた自分に気づきました。これまで何度か来ているウクライナですが、旅行者や誰かにガードされている身分ではなく、生んでみるとやはり違います。日本大使館から注意を促すメールが配信されるほど、外国人（特に金持ちと思われる日本人）が狙われるケースが相次いでいます。私の知っている留学生たちが実際に遭遇した事件だけでも、10件を数えるくらいです。人ごみは避け、混んでいる地下鉄やバスではバッグをしっかりと押さえ、乗る位置にも気をつけます。

「本」や「古着」の市場など、面白いところの写真を撮りたくても、なかなか難しいのです。

「なぜ？」と思われるでしょうが、人の混んでいる所では不用意にデジカメなどは出せません。

### <キエフの光と影>

ウクライナは近年、街がきれいになり、新しいショッピングモール、大型スーパーもでき、物が豊かになってきています。人びとは個性的におしゃれし、女性たちは美しく生き生きしています。その反面、厳しい生活の中にある人もいます。ソ連崩壊後、ウクライナは市場経済化し、持てる人と持たざる人の格差が一層広がっているようです。日本人の私の日常感覚で、とても買えないものが街のショーウィンドーを飾っています。街や公園のベンチで人々が飲み終



えたビールの空き瓶を、生活の足しに集め回っている人をあちこちで見かけます。

「緑の党」の人たちが、キエフ大学近くの文教地区で、ショッピングタワーの建設反対の活動を繰り広げていました。最近はどこも建設ラッシュで、古い建物の傍らに大きなクレーンが林立しています。日本に比べると、格段に公園も広く街路樹も多いキエフですが、「以前はもっと緑が多かったのですよ」とロシア語の先生が言われるように、今、開発の波と環境保護がせめぎあっています。



## <ボランティア日記>

島田 真帆



こんにちは！ 私は今、「チェルノブイリ救援・中部」でお世話になっています。実は、「ボランティア」と言う言葉を使っているのか…と思うほど何もしていません（笑）

河田さんとは、ウクライナの講演を聞きに行ったのがきっかけで知り合い、事務所にお邪魔させていただくようになりました。…というのも、私はかねてから国際協力に強い関心を持っていて、そういう仕事に携わりたい！と思っていたからです。

初めは「困っている人を助けたい」という思いが強かったのですが、母に「あんたごときが役に立つわけがないし、助けるなんて、それは思い上がりだ」と言われたのがきっかけで、今では、「一緒に幸せを分かち合いたい」と思うようになりました。「助ける＝自分が上に立っている」ということになりますものね。与えてもらう方が多いとも思っています☆

基本的に「支援」というのは、与えるのではなく、その方法を教え、自立できるようにすることだと考えます。辛い思いをしている人々の本当の辛さなんて、私にはわかりません。そういう思いをわからずに、ただ「任せておけ！」と言っても、それは結果的にその人々を余計に傷つけてしまうだけの様な気がします。

だから私は、「一緒に考えて、一緒に現状を打破する方法を探していける」…そんな支援をしていきたいです。今は他の仕事をしていますが、日々そういう思いが強くなっています。私は「やりたいことは、やるべきだ」と思っていますので、今はその団体探しをしています。

自分の未来を信じて、突っ走って行こうと思います！！

### 「愛知県国際交流協会助成金」に 30万円の申請を行いました

ナロジチ地区病院の医薬品支援事業の一部として、30万円を申請しました。

今後も救援・中部では、近年漸減しているカンパを増やす努力とともに、助成金獲得にも力を入れていきます。こういった助成金は、支援金の増額のみならず、私たちの地道な支援に対して評価をいただいたという、自信と励みにもつながります。

（佳）

### アルシュ(自立を支援する会)

#### 「第一回かけはし支援基金」 助成金 10万円決定！

特定非営利活動法人アルシュ（名古屋市）は、「世界中の支援を必要とする人々を支える団体に対し援助を行い、人々と団体の自立を推進」し、「国際社会との相互理解と世界の福祉増進に寄与する」ことを目的に活動されています。

その『かけはし支援基金』の募集があり応募したところ、「主に支援物資を途上国に輸送する事業」に対する助成金10万円が交付されることになりました。これは、5月に送り出した船便の輸送費の一部に充てさせていただきます。

（佳）

## 事務局便り

災害列島にっぽん。各地で豪雨被害が出た。被害に遭われた皆様、心よりお見舞い申し上げます。  
また、浜岡5号はまぼろ。よくもこんな原発を動かしていたものだ。ただでさえ暑いのに、頭が沸騰しそうだ！・・・さて、この夏のチェルノブイリ関連企画ご紹介と事務局情報を。

☆7月26日…既に終わっているが、静岡サレジオ学園でウクライナの民俗音楽グループ「コザチェニキ」チェルノブイリ・チャリティコンサートが開催された。これは、チェルノブイリ救援・ウクライナ民族音楽バンド「コザチェニキ」コンサートツアーの一環としておこなわれたもの。「東海ウクライナ会」が主催し、ポーシェでもご紹介した「なごや民間大使」のベレジヌイ・ビタリーさんらが中心になって展開されている。「チェルノブイリより20年を迎え、この惨事を風化させることなく、今日も後遺症で苦しむ多くの人々に対し、支援の輪を広げる事を目的とする。音楽を通してウクライナの文化を紹介し、両国の友好を深める」を趣旨としている。サレジオ学園の音楽の先生が中心となってこの受け入れを企画。子ども達にはとても喜ばれたとのこと話を伺った。コンサート収益の半分(10万円)をチェルノブイリにご寄付くださった。尚、このコンサートは10月8日まで各地で開催される。問い合わせは、TEL 0561-52-4344「東海ウクライナ会」までどうぞ!!

☆8月5日(土)～9日(水)・・・「コスモス日進」主催の「平和展」開催。この「コスモス日進」の活動は、1996年中国新聞社発行「ヒロシマの記録」の写真集を世界各地へ送り、恒久平和を願う草の根グループとして、日進市を中心とした主婦達によって始まったもの。「戦争と平和」や「前線」「環境」をテーマにして活動されている。今年はチェルノブイリ20年ということもあり、「核の悲惨さ」や「平和」について今一度考えようという事で、チェルノブイリ写真展・ヒロシマ・ナガサキ写真展を開催する。場所は、日進市役所横の「にぎわい交流館」2階会議室。10時～16時。日進市蟹甲町中島277-1・TEL 0561-75-6650。

◎事務局情報・・・7月28日・・・ECC地球救済キャンペーン事務局小西事務局長が来訪され、今年もまた、救援金50万円をご寄付頂いた。1992年から始まったこのご支援は、チェルノブイリへの深い理解をお持ちだった亡き山口勇理事長のご意思として、今尚引き継がれているとのこと。「戦争・貧困・病気」そして「環境問題」の解決のために、大変広範な支援活動を続けられている「ECC地球救済キャンペーン」。その報告書には、「人類の三大苦である「戦争・貧困・病気」の消滅をめざし、自然環境破壊を食い止めるため、たとえこれがささやかな努力にすぎなくとも、本キャンペーンを継続してまいります。」とある。ご支援に感謝。(山盛)

## 編集後記

☆ウクライナで外来病院での診察を体験。外国人でも医療費は原則無料だが、付き添ってもらった人に言い、医者に謝金を払う。「いや、そんなものいらないよ。」と言ったけど、一番(?)、二番前の日本もそうだったのを思い出した。(京)

☆免許更新のため、6年ぶりに眼鏡をつくり眼科に行った。医者の方と「よかったですね。まだなんとかが一つで済みますよ。次回はシニアグラスが必要ってことか。(佳)

☆10年ぶりに、ますますボロい原発4号炉まで出かけた。「何より今、外壁の修理をしないと崩れる」とのこと。えー!! 間に合うの? 「机上の空論」という言葉が、体中を駆け巡る。ソッとする話だ。(美)

☆北朝鮮が、ミサイル発射実験を強行。日本の政治家や評論家達も、危機感をあおり立てる。しかし、本当に脅威は迫っているのか? 「戦争中毒人間」の口車に乗ってはいけぬ。インターネットで【9.11.ボーイングを探せ】と検索してみたい。あの「9.11.テロ事件」が、実はアメリカ(を支配する多国籍企業)の「自作自演」であると主張し、証明を試みている。嘘で塗り固めて、「アフガニスタン」を、「イラク」を、そして今また「北朝鮮」をも、金儲けの標的にしようとしている連中が存在する。(J)

〒456-0022 名古屋市中区波島 20-14  
印刷「エープリント」  
TEL・FAX (052) 871-9473